

遠い昔の学生時代、生まれた子どもが大きくなるにつれて、子どもの感情がどのように育つかという講義を聞いた覚えがあります。生まれたばかりの子どもは、幸せそうな顔をしてすやすやと眠るか、微笑むか、顔を真っ赤にして泣くか、いわゆる「快」か「不快」という感情しかない。お母さんの母乳に満たされお腹がいっぱい、愛情がいっぱいという「快」の感情から、幸せ、満足、喜び、楽しい、好奇心などのポジティブな感情に、お腹がすいた、眠い、気持ちが悪いという「不快」の感情から、不安、悲しみ、怒り、嫌悪感などのネガティブな感情が分化していく。その2つの感情は子どもが成長するにつれて、親や周りの人との関わりの中で枝分かれし複雑な人間の感情になっていくという内容だったような、。

今、育てなければならないのは自信を持たせること

歩き出した小さな子どもが、自分の興味を持ったものに対して、自分から歩いて近寄っていくことはよくあります。飼っているペットに興味を持ち、近寄っていくけど突然吠えられびっくりすると、お母さん、お父さんに向かって一生懸命に走って帰ってきます。小さな子どもの目に映るものは知らないものばかり。何だろう、何か楽しそうだ、近くに行行って触ってみよう。でも思いがけないことが起こると、不安になり親の元に急いで帰ってきます。いろいろなことに挑戦し、失敗したら泣きながら、成功したら満面の笑みを浮かべて帰ってきます。「すごいね、頑張ったね、大丈夫だよ」と声をかけてくれることが分かっているからです。安心、安全な帰る場所があって、失敗しても、また次もやってみようという興味関心が広がっていきます。その安心感、包まれ感が幼少の子どもの成長のベースになります。

児童期(6歳~12歳)になるとの生活の場は、家庭から少しずつ学校へと変わり、親からも少しずつ離れて、友だちや仲間との出会いの中で失敗や成功を繰り返し「自分」というものを意識しだす時期に入っていきます。

「愛されている、やればできるという気持ちは、子どものやる気の原動力です。」

これは以前PTAの研修会で講師をされた中部子ども支援センター松島所長の言葉です。小学生の時期の子育てで大切なポイントは「愛されているという実感を持たせる」こと、「やればできるという自信を持たせる」ことだと言われていました。具体的にこの時期に子どもを育てる上で大切な5つのことを話されました。

- ①子どもの話を真剣に聞く
- ②小さな成功体験を積み重ねほめる
- ③頑張りを認める
- ④どんな時もあなたの味方だよと伝える
- ⑤感謝の言葉「ありがとう」を子どもに言う

友だちや家族の関わりの中で、子どもはいろいろな経験をして、自立した大人へと成長していきます。

成長途中にある子どもが前を向き安心して歩いていけるように、失敗したら大丈夫だよと言ってやれるように、私たち周りの大人がしっかりと支えてやりたいと思っています。

